The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	本堂彙報／本會記事／編輯室より
Author(s)	
Citation	懐徳. 1926, 4, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

○　林田炭翁

雪のこる遠ちの深山のふところに
煙たつ見ゆ炭やゝくらむ
さつき山朝日をうけてあかるきは
みとりにはゆるさくらなりけり

竹透きて　仲田博一

八つ手の葉がくりにゐてこの朝け
われ驚かす鵯のこゑかも
夜學よりふけて歸れば寒き部屋に
母は裁縫をしておはしけり
水仙の花活けをれば裏藪に時雨か
そけくおとづれにけり
山の手の燈かげの薄き町ゆけば籠
飼の鶉啼くこゑ聞ゆ
驛前の廣場をちこち薄氷白くはり
ゐて朝風ふくも

○　池田寺部君子

春雨はいつやみにけむ見渡の野へ
は霞の立ちこめてあり
日あたりをゑらひて竿をかけにけ
りかたえは庭の梅か枝にして
あけひはり雲のかなたに消え去り
て廣野ゆたかに春の風ふく
燒かれたる芝生の中に青々とよも
き生てぬ土筆生ひてぬ
畑うちに交ちる女の八つ口の黄な
る蝶々にもつれて紅き
土筆入れておもたき袂かゝへけり
此頃の事なき庭や落椿
白酒や何となき名のなつかしき
暮れし野に白きは畑の辛夷かな
土蜘蛛の這ひ出てにけり花の庭
鳥府に切口のよき池田炭
なれそめし鍬の名殘や今日一日

○　藤塚まこと

鍬の手を止めて煙草やうらゝかに
渡し舟を二三人待つうらゝかに
女客大勢のせて水温む
都踊りの提灯ともる一齊に
ヲヂオ聽いて山居の春の夜の團欒

本堂彙報

◎理事會　四月七日大正十四年度決算及び同十五年度豫算案の件並に來十月記念祭典の件、書庫建造の件等につき理事會開會決算豫算兩案は畧原案通り可決他の案件は尚更に會合を要することゝし、只記念品作製の事項のみ可決された、

◎貴族院議員　茶話會員服部一三、倉知鐵吉、石塚英藏、澤柳政太郎、荒川義太郎、淺田德則藤田四郎、嘉納治五郎の八氏、同十四日午後四時永田理事長の案内にて來堂、堂内を一覽して松山教授の説明を聽取された、

◎若槻首相　同十六日午後二時永田理事長の案内にて來堂、同じく堂内を一巡、松山教授の説明を聽取された、

本會記事

十四年五月—十五年二月

十四年五月二十五日　名譽會員東北大學教授武内義雄先生來阪せられしを機とし、講義終了後午後八時より歡迎茶話會を小講堂に開催し三十餘名の參會者があつた、

六月一日　會員並本堂聽講者有志醵金の北但震災義捐金を精算し、合計八十七圓也を取纏め、大阪朝日新聞社に寄托した、

六月十二日　支那留學中の吉田鋭雄先生歸朝せらる、會員數名本會を代表して神戸埠頭に歡迎した、

六月二十八日　吉田先生歡迎を兼ね、夏季茶話會を午後一時より大講堂に開く、吉田先生は留學中の見聞並に感想を述べらる、

七月二十九日　本堂に於て西村家が碩園西村先生一年祭を執行せらる、早朝より會員參集夫々分担助力する、當日北小講堂に故先生の遺稿遺墨を陳列し展覽に供した、展覽遺著二十九點、遺墨二十五點親しく先生の謦咳に接するの思があつた、此日式終了後、會長松山先生、太田幹事は、本會を代表して、故先生の墓に參拜せられた、

十月四日　懷德堂恒祭を舉行せらる、朝來會員參集分担助力する、

十一月二十一日　野口幹事の盡力奔走にかかる『懷德堂考』和裝本五十五部成る、希望申込數數倍に上りたれば按分配布した、

十一月二十三日　秋季探勝會を舉行、紀州根來寺に向ふ、會長松山先生同令夫人、吉田先生以下會員十數名參會、天氣清朗風穩かであつた、

十二月三日　名譽會員永田仁助氏貴族院議員に勅選せられしに就て賀詞を呈することを定例幹事會に於て可決し、小沼幹事會員を代表して之を齎らし奉呈した、

大正十五年二月十四日　午後一時三十分より大講堂にて冬季茶話會を開く、會長松山先生、名譽會員今井、稲東兩先生、主幹吉田先生を初め會員約五十名參會、襲に吉田先生が手に入れられし稀覯の書呉康齋文集二套十二冊本を主題として、松山先生の講演あり、次に當日の講師名譽會員狩野先生は『儒學の二方面』と題し、仁と禮とに就て御話があつた、それより茶菓を喫し、互に談笑の内に岡田幹事會務を報告し、太田幹事會計報告をなし、小沼幹事會則中改正の要旨を述べ、松山先生より補説せらるるところありて後、賛否を起立に問ひ、原案通り會報は毎年一回發行、會費を毎年一圓二十錢と改め、本年は會報を休刊し、中井甃菴先生著『とはずがたり』を本堂二百年懷德堂記念會十年記念のため覆刻して同會に寄附し、尚其一部分を會員に頒つこと、會報は臨時號等適宜發行等の件を可決し、ついで幹事の改選に就て、隔意なく協議し、投票互選し、ついで官命により歐州へ出張し最近歸朝せる會員三宅春陽氏は、外遊中實見せし事柄につきて、「ベルリン市にまゐりて、第一に感じたることは、國民自身の努力が各方面にあらはれてゐることで、婦人にも頭髪の裝飾を用ひぬ人が多く、近頃前垂れがけで町をあるき、味噌こしを持つて物を買ひに行く風で、男子もくるぐる坊主が多い、餘程經濟復興に努力してゐるのが分る、」などの感想談あり、開票の結果を岡田幹事より發表、中川幸三、今西茂喜、太田勘兵衛、阪田廣吉、山本楢信の五氏當選、山本幹事より會報臨時號等適宜發行のことに就て了解を求め、皆これを可とし、午後五時散會した、

▲編輯室より

世わたりが苦しくなると、遠い昔がなつかしくなる。なつかしさのあまり、血の氣かよはぬ木石に夢を刻みこみて禮拜さへするやうになる。それで滿足できうる幸福な人もあらうが、私どもはさやうなことでは得心できない。遺された先哲のことばをたよりに、血のかよつた聖賢の魂にふれやうとあせるのは、やむにやまれぬ我々の魂である。古き心の故郷から、くめどもくめどもつきぬあたらしき生命の泉をくみとつて、今のくるしみを慰め、永へに若く清く力强く滿足に生きることをのぞむ心が自然に集つてこの會をなしてゐる。この會報はかうした會員の會報である。論説に感想に、會員の精神の活潑さがうかがはれるべきである。第四號はその見本として出された、次號よりいよ〳〵面目をあらはしてくることを信じてゐる。熱心なる會員が赤裸々な魂の記錄を續々投稿せられんことをのぞんでやまない。寄稿の集り次第ひきつゞき發刊する。（楢信）